「 さ さ え 」

2009年1月発行 情報誌 第26号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所：福岡県田川市伊田4395（福岡県立大学付属研究所 生涯福祉研究センター内）

TEL／FAX： 0947－42－2286

E－mail npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp

HP http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm

情報誌「ささえ」は年4回（1月・4月・7月・10月）発行しています。

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがＮＰＯ福祉用具ネットを元気にします

床ずれ防止ハイブリッドエアマット「ピーウェーブ」

P-Wave

介護保険貸与対象商品

本製品は福岡県産炭地域振興センターの助成を受けて産学官で共同開発した商品です。

特長

床ずれが一番発生しやすい腰周り部分だけが膨縮するエアマットタイプ。

部分的なエアマットなので浮遊感が少なく寝心地がとてもよい。

特定非営利活動法人

NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育んでいきたい‥」

認知症ケアと地域支援

NPO福祉用具ネット理事長　豊田　謙二　(熊本学園大学社会福祉学部教授)

認知症高齢者は確実に増加を続けている。「患者調査」による推計では、平成 17 年度で約321万人、その内の約3分の2が居宅、残り3分の1のさらに3分の2が特別養護老人施設などの入所施設、3分の1がその他グループホームなどのケア施設で生活しているのである。この数値は認知症患者のみであり、軽度の症状で在宅の人は含まれていないので、それらを含めると認知症高齢者の実数はもっと膨らむ。

認知症は「不治の、脳を冒される恐ろしい病」というイメージを持つが、ブラッドフォード大学(イギリス)老年心理学教授のT．キッドウッドは「パーソンセンタードケア」を提唱して、認知症高齢者を「病人」から解放して「生活者」として地域に戻す運動を進めてきた。つまり、「**認知症の人**」を「**認知症の人**」へと認識の転換を求めているのである。また認知症高齢者の生活での不自由さを、もっぱら知能障害、つまり脳の器質障害に帰着させないで、総体としての人として理解しよう、と求めたのである。

1880 年代に開始されたこの認知症パラダイムでは、1890 年代に「ディメンシア･ケア･マッピング」と呼ばれるケアの評価方式が提案されたが、その方式には二つの柱がある。「その人らしさ」(パーソンフッド)と質の高いケアによる「良い状態」(ウエルビーング)を高めること、この二つである。このパーソンセンタードケアはイギリスではもちろん、ドイツや北欧においても認知症高齢者施設に導入されている。

キッドウッド教授のパラダイム転換の提唱は、「医療も出る」から「生活モデル」へのケア転換の潮流は 1970 年代のトリエステ(イタリア)の社会運動に学ぶことができる。それは、精神科医バザーリアによる「精神病院解体」運動であり、1980 年にサンジョバンニの精神病院が閉鎖され、2000 年には保健大臣から国内の公立精神科病院の完全閉鎖が宣言された。もちろん、病院が閉鎖されるには地域での受け入れが必須条件であり、それは住居と就労に関するソーシャルワークを不可欠としたのである。

精神障害者とともに地域での生活づくりを進めるために、トリエステでは社会協同組合が組織された。長寿の故に認知症を患ったとしても、その居宅で死を迎えるまで住み続けるための支援体制が欠かせない。まずは、地域での偏見や無知による差別をなくすための啓発活動、さらに今日、認知症高齢者に対する任意の、自律的な住民支援組織の立ち上げが求められるのである。

新年おめでとうございます。
本年もよろしくお願い致します。
平成２１年　元旦

足と靴の相談室オープン（シリーズ1）

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター　助手　中藤広美

「あなたは足のことでお悩みをお持ちではありませんか？」

◆　タコやウオノメが痛くて歩くのがつらい
◆　足が疲れやすく、立ち仕事がつらい
◆　外反母趾で、合う靴がない
◆　膝が痛く、長時間歩くのがつらい　・・・　などなど

今年8月から本学で「足と靴の相談室」がオープンし、その相談員として研修を積んできた私が相談をお受けすることになりました。今回から数回のシリーズで相談室が行っている活動についてご紹介します。

第一歩・・・

この取り組みの第一歩は2004年の秋に福祉用具研究会でNPO靴総合技術研究所より渡辺好庸氏、渡辺さ江氏をお招きし『「足と靴」の問題性と福祉拡充運動』という演題で講演をして頂いたことです。その4年後に県立大学に「足と靴の相談室」がオープンされたのです。その時の講演では、多くの日本人が変形性膝関節症、外反母趾、開張足などのトラブルを持っているという事をデーターや事例で紹介されました。驚いたことにはそういったトラブルを抱えながらも、何も対処せずに我慢し続けている人の多いこと、さらに進行して歩くこともままならないような状況になって初めて病院を訪れている方が多いということでした。当初は福祉用具研究会の活動の一環として研究会代表の豊田先生を中心に活動を進めつつあったのですが、その後、本学内に新たに「足と靴」の問題性と福祉拡充に関する総合研究プロジェクトを発足し、そのプロジェクトの取り組みの中の一つが今回の「足と靴の相談室」の開設です。

この相談室の主な役割は・・・

◆　住民の足と靴の相談に応じるサービス
◆　「足と靴の相談技術者養成講座」の実習の場
◆　足、靴、歩行に関する啓発活動

また、実際の相談内容は・・・

◆　「靴の正しい選び方・履き方」「外反母趾、タコ、ウオノメでお困りの方」「自分の足に合う靴がなかなかない」など、足と靴に関してお困りの方の相談。
◆　足の健康になくてはならない「歩行具としての靴」のご紹介。
◆　ひとりひとりの足の状態に合わせてカスタマイズした靴やインソールのご紹介。

この相談室は完全予約制です。また、地元の整形外科医と連携し膝の痛み等お医者様の診断が必要な場合は、整形外科医の指示をいただいて治療用装具としてご提供するようになっています。

なお、当相談室は来年度から本学で開講予定の看護師、保健師、その他医療職や介護職、幼児教育者さらには「足と靴の相談室」に強い関心をお持ちの方々を対象とした「足と靴の相談技術者養成講座ステップ1（仮）」のリカレント教育の実習の場としての位置づけにもなっています。

次回はこの相談室で実際にどのような流れで相談が進められているのかをご紹介したいと思います。

（つづく）

生涯福祉研究センターのロゴが入った靴

心ひかれた福祉用具≪マイチョイス≫ （シリーズ６）

NPO 福祉用具ネット会員（理学療法士） 井内 陽三

ポータブルトイレとの格闘と、「忘れないでね」の思い出

脳血管障害後遺症（のうけっかんしょうがいこういしょう）と高齢による筋力低下により、ベット上の生活を余儀なくされていた、１００歳近くのTさんのベッドからポータブルトイレへの移乗動作を検討したときの思い出です。

Tさんは、お嫁さんの介助で排泄はポータブルトイレで行っていました。しかし、徐々にお嫁さんの腰痛が出現し、トイレに移れなくなるかもしれないという問題発生。実際に介助動作を見せてもらうと、Tさんは何とか足の支えはあるのですが、介護者は、ほぼ全介助で移乗をおこなっていました。方法としては、ベッド横にポータブルトイレが置いてあるのですが、「一旦、抱えて立たせ」→「体を支えながらズボンを脱がせて」→「９０度回転させ着座」。想像できるでしょうか？ 介護方法の教科書に出てきそうな、典型的な方法で行っていました。普通じゃないの？と思われるかもしれませんが、これを行っているのは、７０歳代のお嫁さん。そう、いわゆる「老老介護」なのです。なので、とても介護者に負担がかかる方法で移乗を行っていたのでした。

この負担をなんとか軽減できないかと考え、目をつけたのは、ポータブルトイレの形状でした。最短距離で移乗するのに一番邪魔になるのは、「移る側の手すり」。しかし、しっかりと固定されており、どうしたものかと行き詰まり・・・・。

しかし、よくよく観察すると、六角レンチの穴があり。思い切って「キュ・キュ・キュ、ポン」。壊れた！と思いきや、組み立て木ねじと長ねじで留めてある手すりでした。取り外し、成功。すぐに移乗動作を行ってもらいました。介護方法は大きく変えることはできなかったですが、まっすぐ立たなくても移乗できるようになり、ズボンはベット上で脱がせてしまえば問題なし。負担はわずかでしたが軽減できたのでした。
Tさんと介護者のお嫁さんが笑った顔が印象的でした。

実は、この話を思い出したのは、1枚の写真を見つけたからでした。このエピソードから少し経って、一枚の写真を渡されました。デイサービス利用時の写真で、他の方々と楽しそうに、とても穏やかな顔で写っていました。行事の写真を見せてくれたと思っていたら、「あげる」と言われ、「エッ？」。「忘れんでね・・・、私のことを忘れんでね・・・」。

いつも、すてきな笑顔で迎えてくれたTさんなのでした。

（ポータブルトイレの選定に関して）

- **移乗動作や介護方法に合わせた形状・重さのものを選びましょう。**
- **「立ち座り」と「いきみ動作」の二つが成り立つ座面の高さに調整できるものを選びましょう。**
- **生活空間に置く物なので、可能な限り置く場所やデザインも考慮しましょう。**

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」

（その17）

九州日立マクセル㈱開発本部長　坂田　栄二
（NPO福祉用具ネット理事）

使い方の分りにくい介護シャワー

国際福祉機器展までもう、待ったなし。そのときに事件は勃発した。それは、松原がP－Waveの開発と平行して、密かに開発を進めていた介護シャワーである。

「松原さん、このシャワーはどうやってお客に売るの？自分だけ分かっていても誰も見てくれないわよ。売り方を考えなさいよ。」

いつもの口調で大山は大声を出す。

「誰が見てもシャワーと判る形じゃないか！誰でも簡単に使えるよ」

松原も反撃する。HCRまで余すところ時間が無いので、みんな殺気だっている。

一段と大声で大山は、

「そうじゃなくって、このシャワーをどうやって使えばいいのか教えてよ。お客はそこが知りたいはずよ。

松原さん、あんたはこれで寝たきりの人の頭を洗ったことがあるん？私が洗ってやろうか？‥‥そうや！使い方のビデオを作ったらいいんじゃない？それを会場で連続してテレビで流すのよ。そしたらこのシャワーの良さがお客様に伝わるよ。」

松原は、大山の言いたいことがよく分かったとでも言いたげに、

「今からでも間に合うのか？」

「間に合わせるわよ。私が手配するから。坂田さんを呼んできて！撮影してもらうから。モデルは松原さんじゃリアルすぎるから、若い県大の大学生に頼むわ。それと、‥‥洗う人は大倉先生に頼んで‥‥」

誰も経験のない編集作業

大山の手配で、洗髪シーンの撮影が始まった。

カメラマンは坂田。ディレクタはいつもの大山。P－WAVEのカタログ写真撮影とまったく一緒。これじゃすべて自作自演。コストを切り詰めての田舎製作。

一通り撮り終えた後は編集が待っている。これに時間がかかるのが映像の世界。

誰が編集するのか？誰も経験がない。翌日の土曜日、会議室にビデオカメラ、デッキ、パソコン‥‥など機材を持ち込み編集開始。しかし、まずは機器間の配線でつまずき、うまく作動しない。

次に編集ソフトの使い方が判らない。取扱説明書を読みながらの試行錯誤。はかどるわけがない。

編集ソフトを使いこなせるようになったのは明け方近く。さすがに初秋の朝方は肌寒い。ようやく出来上がった。

大山は疲れも忘れて、初めから通しで確認をしている。だんだん顔が緩んでくる。

「うん、これで大丈夫やわ！妥協するところは妥協しないとね。完璧には出来ないし。」

（このビデオ作品（？）は、もちろんHCRの会場で放映された。ビデオの前を通る来場者の中には、足を止めて、洗髪の仕方を食い入るように見入り、メモする人もいた。またある人は、「母の頭を自分で洗ってあげたいので、これを譲ってください。」とたずねてくる人もいたことを付け加えておきたい。）

荷物の送り出し

HCRを3日後に控え、今日は荷物の送り出し日である。朝から、研究棟の中は荷支度で大忙し。持って行く物のリストを大山が読み上げる。それにあわせて「OK！」「完了！」の声が上がる。大山が作った忘れ物リストには、帰るときのゴミ袋やガムテープまで書き挙げられている。

運送屋さんのトラックがやってきた。チャーター便なら簡単に詰め込むだけですむが、節約のために混載便を選んでいた。そのため運送屋さんが扱いやすいように全てダンボール箱詰にしてある。箱の表には、何が入っているかの紙が貼られ、通し番号が振られている。一番大きな箱は、もちろん今回の主役のP－WAVEが入っている。ほぼ畳1枚がすっぽり入る大きさである。傷つけないように2人掛かりで荷台に持ち上げる。うまく収まった。カタログのいっぱい詰まった箱も載せた。

「それじゃ、お預かりします。」

と、トラックは出て行った。

「みんな、ようがんばったね！」

そこに居た者は、もう他に忘れ物はないか周りを見回しながら、肩の荷が下りて安心したかのように腑抜け状態だった。

「さあ、私たちも出かけようか！荷物よりも先に着いとかんとね。」

大山は、皆をねぎらうように声を掛けた。

この1ヶ月は、まさに嵐の連続だった。本当に展示品が間に合うのか、カタログは出来上がるのか、自分たちの開発成果をお客に見てもらえるのか、不安とあせりの中でみんなは走り回った。そんな努力を一番知っているのは大山である。

「みんな、よう頑張ったね。よう出来たね‥‥。」

声を詰まらせたのを悟られまいと、やや高めの声でねぎらった。

ここが 「 東京 ビッグサイト」

電車の窓越しにそそりたつような大きな建物が迫ってくる。ここがビッグサイトか！正面玄関は大きな看板に

「国際福祉機器展2003」

と書かれている。大きな荷物を積んだトラックがたくさん出はいりしている。決戦の場に来たぞ。私たちの成果の真価が問われる場だ。

大きな会場の中で、ブースの割り振り図を見ながら、自分

たちのブースを探す。

「あっ！ここだ。」

先を急いでいた中谷の声が聞こえた。皆は急いだ。

「え‥‥っ！小さ（ちいさ）‥‥‥」

確かに小さい。最小の小間サイズを選んで覚悟していたとはいえ、とても小さく感じる。あまりにも会場が広いためか。5人はしばらく立ちすくんでいた。やがて周りを見回した。せわしげにたくさんの人が行き来している。ブース内に飾りつけを始めているところもある。

「もう、荷物のほうが先に着いてるやないか。」

ブースの入り口には昨日送り出した荷物が置かれていた。

松原は、たくさんの箱の中から小さい箱を選んで、中からカッターを取り出した。

「俺たちも展示しようか。」

「そうね。負けちゃおれんね」

大山の負けん気に火が点いた。

「中谷さん、まず壁紙を張ってね。松原さんと大倉先生は箱を開けて中身を出して‥‥」

いつもの調子である。

貼れない壁紙

中谷は、丸い長筒から丸められた壁紙を取り出した。それを広げて壁に当ててみる。

「あれー。衝立パネルの継ぎ目が邪魔して貼れんぞ！」

パネルとパネルの間をつなぐフレームが飛び出て壁紙が浮いてしまう。これじゃ、壁紙が凸凹に見える。予期せぬ出来事は現場で起きるものである。九州で壁に並べて貼ってみたときはきれいに貼れたが、これはまさにハプニングである。

困り果てた中谷。

「どうしたんね。はよせんね。」

隣近所を偵察に行っていた大山は戻ってくるなり、まだ貼られていない壁を見て、ブースの中に入ってきた。

「簡単じゃないの。飛び出た高さの分だけ壁紙の裏にダンボールを切って持ち上げなさいよ！」

そりゃそうだけど、とでも言いたげに中谷は、やおら腰を上げてダンボールをサイコロ状に切り始めた。それを坂田が順番に壁に貼っていく。その上から試しに壁紙を一枚だけ貼ってみた。うん、確かにきれいになりそうだ。中谷も納得して、どんどんダンボールを切り続けた。こうしてブースの壁に大きな「続き絵」 が出来上がった。立派な出来栄えであると眺め続ける中谷を見て、

「いつまで見ようとね。はようベッドを運びこまんね。しゃんしゃんせなー。」

大山は、東京に来てまでも田川弁丸出しであるが、一向に構う気配もない。それを聞くみんなも慣れたものである。

「大倉先生と松原さんは、カタログにチラシを挟んで封筒に入れてね。明日、配るからね。」

ブース内は、どんどんと お店の雰囲気が出てくる。展示会は束の間のお店なのだ。（つづく）

「第１０回西日本国際福祉機器展」に出展

事務局　大山　美智江

11月28日金曜日から30日の日曜日までの3日間、北九州市の国際展示場で開催された展示会に今年も共同開発品や開発協力をしている関係企業の新製品を展示しました。

「P・Wave」や「洗髪シャワー」、「パシーマボックスシーツ」はNPOの主力商品ですが、現在開発中の「車いす用圧切り替え型エアクッション」、「自動採尿システム」、「ロボットハンド」や会員が販売している「リハビリおもちゃ」や「パシーマの肌着」など出展し注目されました。ブース内の掲示用パネルは九州日立マクセル㈱のデザイン部が協力してくれました。

また、今年は新しい企画として、ブース内で「介護技術セミナー」を開催いたしました。この企画に際しては、講師の派遣を大分県別府市の社会福祉法人農協共済別府リハビリテーションセンターのご協力をいただきました。講師の山形茂生先生とともに実技のサポートはNPOの仲間の皆様がお手伝いをして下さいました。介護・看護・リハなどの専門職の方から学生の皆様、障がいを持つ当事者や高齢者とそのご家族の方など多くの方達が熱心に聞いておられました。希望者には個別指導も行いました。

いつもながら会員の皆様にたくさん助けていただくことができるのでこのような大変な事業も容易に開催できることを事務局として誇らしく、また嬉しく感謝の気持でいっぱいです。ご協力いただいた皆様、またブースにいらして下さったたくさんの皆様、本当に有難うございました。

ブース内セミナー開催協力:

九州日立マクセル㈱様、㈲三電様、シーホネンス㈱様、ラックヘルスケア㈱様、別府リハビリテーションセンター様

展示協力:　日立製作所／ユニチャーム様、龍宮㈱様、木原鉄工所様、九州日立マクセル㈱、福祉SDグループ様、INOHIZA ROCKET様

介護技術セミナー　「トランスファーボード・シートの使い方」

NPOのマスコット「さくらちゃん」と「キューピーちゃん」

福祉住環境コーディネーター協会主催

施設等「見学会」のご紹介

事務局　大山　美智江

NPO福祉用具ネットでは福祉住環境コーディネーター協会からの委託事業として、先駆的な取り組みをされている九州・山口県内の施設見学の企画やご案内をしています。5月にはTOTO歴史資料館、6月には別府リハビリテーションセンター、7月は山口県の夢のみずうみ村を訪問しました。最近訪問させていただいた次の2施設について皆様にもご紹介いたします。

■　特定非営利活動法人おーさあ

健軍くらしささえ愛工房見学会、10月9日木曜日

熊本市にある小規模多機能型居宅介護（通い・泊まり・訪問）サービスと一般型デイサービス（定員15名）で24時間365日の安心を目指す「健軍くらしささえ愛工房」の見学をさせていただきました。健軍くらしささえ愛工房は平成17年10月に熊本県の地域福祉事業の「地域の縁がわ」づくりモデル事業として、県営住宅の1階に福祉機能を整備し、地域住民、ボランティア等との連携による事業をスタートし、地域福祉の普及啓発に取り組んでいます。工房では、①介護保険法に基づく事業として、小規模多機能居宅介護・デイサービス事業。②自立支援法に基づく地域生活支援事業として、平成19年4月より障がいを持つ方々を対象とした通所でのサービスや配食サービス事業。③地域の縁がわの活動として、人々が日々の暮らしに安心を覚え、気軽に集え、ふれあう「新しい地域の縁がわ」を創っており、子育て支援事業(子育てルーム)や障がいをもつ方が就労できる喫茶・軽食コーナーも運営されています。

地域の縁がわ事業とは：地域住民が高齢になっても障がいがあっても、日常生活圏内で在宅または地域でその人らしく暮らしていけるような、住民交流サロンや小規模・多機能ホーム、さらにはサテライト施設や地域交流型の小規模作業所などを単独または複合的に運営する機能・場の総称。（ホームページおよび地域の縁がわ全国セミナー資料より引用）

県営住宅8階建ての1階部分を活用。子ども・障がい者・高齢者、さらに地域の住民も参加しての「地域の縁がわ」としての場。

■ 別府太陽の家見学会、12月5日金曜日

太陽の家の理念は**～人間としての尊厳が保たれる社会の実現～**とされています。1965年に創立され、障がい者が働き、生活する施設として障がい者の自立支援活動に取り組まれています。創設者の言葉として紹介をされていた**「保護より機会を」**の言葉がとても印象的でした。

今回は施設のご協力で、歴史資料館・食堂・スーパーマーケット「サンストア」・大分銀行・体育館・太陽の家工芸科（授産場）・共同出資会社オムロン太陽（株）の見学をさせていただきました。何と、スーパーマーケットにはシニアカーで店内に入りお買い物をされていました。商品を陳列している間のスペースが広いからです。銀行のカウンターの高さはすべて車いすの高さに合わせて対応。電話ボックスなども高さや間口の広さ、電話機の文字の大きさや扉の開閉などに配慮がされていました。

公衆電話ボックスにもさまざまな工夫がされています。

スーパーのお買い物に利用する「車いす用トレー」

★次回の見学会の予定

平成21年1月24日（土）10時から12時に**長崎県「かいごの花みずき」**をご案内いたします。在宅サービスの他、入所サービスとして、住宅型老人ホーム（定員 50）と介護付き有料老人ホーム（定員 22）があります。お申込に関する詳細は福祉住環境コーディネーター協会ホームページをごらん下さい。

「百聞は一見に如かず」　大変参考になりますよ！

皆様からのお薦めの施設情報なども事務局大山までお知らせいただけると助かります。　連絡先（0947-42-2286）